

男豚夢悪め責金



玉子王子 著

一章 リンクの光

高い壁。そこで囲まれた中に原道理夢（どりむ）の一族が経営する畜産場がある。だが、道理夢は幼いころから一七歳の今日まで、一度もその壁の中に入ったことはなかった。

「あ、道理夢くん。こんばんわ」

そう愛想よく声をかけてきたのは、二〇ほどの作業着の女。道理夢の従姉の原珠美。

壁にある大きな門。それは車が通るためのものだ。

その横の人が出入りする扉が開いて、五十人ほどの人間が出て来ていた。珠美はその一人だ。

みな女ばかり。中心は道理夢の母や伯母。

祖母世代はもう現場から離れているが、逆に道理夢と同じ世代といえる妹——同じ世代といってもまだ妹は一〇歳だが、子供世代という意味では同じだ——従妹たちも休日には作業を手伝い、いずれ家業を継いでいく準備をしていた。

それと、バイトの女性たちが数十人。ある程度力があるので二〇から三〇までぐらいだ。

原道理夢は高校生。家は結構有名な畜産農家である。

飼っている生物はよくあるデザイン系の生物。DNAを改造して都合がいい形に改良したもの。

シャンデリアと呼ばれる、豚を改造した種族だという。

シャンデリアについて調べることは母からきつく禁止されていた。

そういうことをしているのだから、道理夢が生きている時代はもちろんずっと未来である。

ついでに言えば道理夢が住んでいる星は地球ではない。とある場所に発見されたワームホールの先にあった宇宙の中の星の一つ。

人口は十万程度で、人が住んでいない場所のほうが圧倒的に多い。道理夢の一族の畜産場も地球では考えられない広大な物だった。

「こんばんわ珠美姉ちゃん」

母の姉の娘で二〇歳だが、高校を出てすぐに家業に入った原珠美。名前通りというか、学生時代は女子サッカーで活躍していた。一族の女性は大体巨乳だが、珠美は特に大きめでサッカーボール二つ抱えているような感じだ。もっとも、母や伯母たちはいわゆる爆乳熟女というやつで、もともと巨乳だったのが中年に入って全身の肉付きがまし、当然乳房も巨大化という流れをたどっているので大きさそのものは珠美を大きく上回る。

——でも、ババアの乳なんて贅肉の一種だからノーカン、ノーカン。一族一の巨乳はやっぱ珠美姉ちゃんっしょ！

流石に伯母たちがいる状況では口に出せない道理夢。

ちらちらと従姉の巨乳を見てしまう。

当然気づく女たち。にんまりと笑い、近づくのは母の妹の娘である、中学の従妹杏。

「道理夢、珠美姉ちゃんのオッパイちらちら見て大丈夫？」

「な、なんだよ杏、見てねえよ」

「見てたじゃん。危ないよ？ お姉ちゃんサッカーやってたから、キック上手だし……蹴られちゃう

よ？」

「け、蹴られるって」

「うふふ、ボールを」

ボールを蹴られる、といわれて、男が真っ先に考えざるを得ないのは股の間の急所ボールしかない。思わず膝を締める。

と、赤らんだ顔でそれを見下ろし、破顔する杏。

「きゃははは！ 見てみて！ 道理夢お股閉じて何か守ってる！ そこになにあるのかな？」

「ま、まもってねーよ！ はうっ！」

ギュム、と遠慮もくそもなく、道理夢の太ももの付け根を握る杏。

「はい金握りー！」



「ちょ、ほおおお」

目を剥き、つま先立ちの道理夢。

周りの女たちは心配するどころか嘔き出す。ナノメカが発展し、玉が潰れたぐらい秒で治せる世界なので睾丸を持たない女たちはそこへの攻撃に大した抵抗感を持たない。

「きゃははは！」

「く、くう」

見回す限り身内の女ばかり。それが笑う笑う。

笑う母、一〇歳の妹、珠美とその妹でやはり一〇歳の従妹、バイトの女性たち、とにかく女ばかり。

——こ、こんだけいて玉ついているのは俺だけだから、同情してくれる奴は一人も……あ、でも。

周りの全員は「付いていない」ことでは同じだ、しかし、一人だけ止めてくれそうな人間がいた。

杏の母親、母の妹の紬だ。

「つ、ツムギおばさん！ こいつなんとかして！」

「あはは、ごめんねー道理夢ちゃん。杏、男の子のそこは弱いから加減するのよ。男の子の……タマタマは弱いんだからねー」

杏ではなく、道理夢の方を見ながら言う叔母。男の急所を言葉で弄られ、どういう反応を見せるのか楽しんでいるようだった。

——俺の反応楽しんでやがる……ああ、みんなこんな感じなんだようちの親族は。特にオバン連中は遠慮がない。そんなオバンとしては、俺の救援要請はむしろ弄るチャンスってわけだ……



絶望し、握られているしかない道理夢。

娘の方は笑って答える。

「わかってるよー。だって私たち……慣れてるもん。ね？」

「あ、こらこら杏。中のことは話しちゃだめよ」

「わかってるって。うふふ、でも皆……結構育ってるよ？ こいつの本陰囊」

——な、中の事？

唾をのむ道理夢。

家業についてあまり興味を持たないように育てられてきたので、畜産自体にもあまり関心がない。
しかし多少は知っている。

——こ、こいつまさか……結構、きよ、去勢とかやってるのか？

去勢慣れた女。

それが自分の肉袋を握っている。

今仕事帰り。もしかしたらほんの少し前にも、抜いていたのかもしれない。

見下ろす道理夢。

年下従姉の華奢な手。

イメージする。

その中に握られている、自分の並みよりは大幅な二つの睾丸を。

握っている華奢な手は少し握り、少し緩めと、微妙に動いている。

——こ、この手は玉を抜きなれてるのかも……

「あは、何見てるのよ。男ならやり返したら？」

杏が開いた手を伸ばし、道理夢の手を掴む。

そして作業着の股間に掌を当てる。

作業着とはいえ柔らかい、遺伝子操作された家畜が普通にいる時代にふさわしい高度な素材。が、そんなことはどうでもいい。

掌から伝わってくる感触。

平らで、何もない。

「ほらほら、握ったら？」

顔を赤らめている杏。実は、この年上従兄に好意を抱いている。男としてだ。だからこそ、股間など触らせる。

「道理夢ちゃん、遠慮なくやり返していいのよ」

「お兄ちゃんやっちゃえ！ 握りあいだ！」

「道理夢、握り潰しちゃいなさい！ 頑張るのよ！ お母さんが付いてるわよ！」

「ぎゃははは！ お姉ちゃん無茶言うわ！ 杏はそこになにもついてないのよ！ 女の子だから、股間に握る物なんてないの！ あと、お姉ちゃんだって付いてないじゃん！」

「紬！ その「付いてない」じゃないわよ！ もう！ っていうか自分の子には付いていないのをいいことに「遠慮なくやり返していい」ってねえ」

「これは互角の状況ねえ」

「そうよね、同じように股間に手をやってるんだし」

「むしろ、道理夢くんのほうが有利でしょ？ 男の子なんだから、何倍も力強いんだし」

「なるほど！ そりゃそうよね。男女の股間の握りあいなら、力が強い男有利」

「あ、なるほどね！ よく考えたら男有利じゃん！」

「確かに！ これは女より力の強い男有利の状況！」

「くうう」

有利だと囃されても、まるで励まされている気にならない道理夢。実際、励まされてなどいないのだから当然だ。

——クソが……股間守る必要がない連中が、それをはっきり意識しながら、守らなくちゃならない奴を見下して「有利だ」なんて適当なこといいやがって……でも、その間違いを言い立てても「この中でただ一人、俺は股間が弱いぞ」って自ら言いまくることになるから、全然プラスでもなんでもねえ。股間攻め合う形になった時点で、男は女に勝ち目がない……

顔を赤らめ、完敗の形勢を噛み締めているしかない道理夢。

握る物がない手が空しく杏の股間を覆う。

逆に、同じく股間に手を伸ばしながらしっかり何かを握っている杏。

眉を八の字にして、下から道理夢を見下す。

「きゃはは！ 私不利じゃん、どうしよう？ ギゅっぎゅっぎゅー」

「はぐっ！ やめっ、潰れるっ」

「潰れるほど握ってないって。私たち詳しいんだよ？ どのぐらい握ったら、おキンキン潰れるかどうか。私はもちろん、こんなちっちゃい女の子の理須夢も墨子も……いや、直接握り潰しはしないけど、どのぐらいで潰れるかは……」

「杏お姉ちゃんだめだって！」

「あ、そうだったそうだった」

「く、ふううう」

——やっぱり壁の中じゃ、普通に業務で去勢しまくってるのか？ 道理でここで働くようになってから、理須夢が風呂で玉揉ませろって言いだしたわけだ……家畜の玉と比べてたんだ……っていうか、あいつがその気になったら、俺の玉だって……

妹のほうを見る。一〇歳で、下手をすれば道理夢の半分の体重もない。

それが兄の目線に気づくと、目を輝かせる。

「お兄ちゃん！ 頑張って杏お姉ちゃんの握り潰して！」

「に、握れって……」

杏の股間に、彼女によって押し付けられている手を握る。空しく、ただ拳を握るだけ。

一方で、杏自身はしっかりと握り込んでいる。道理夢の男の命を二つとも。

その様子を見て、ニヤニヤの女たち。同類の絶対優位を確信し、自らの優位さを強く認識して気分がいい。

「道理夢も握ったわね」

「道理夢くん頑張れー」

「頑張らないと女の子になっちゃうぞー」

「あ、それだと一緒に働けるね？」

「これも切っちゃってね」

小指を立てる珠美の母。

「お母さん、道理夢お兄ちゃんのこのぐらいだよ」

小さな手で長さを示すのは無理で、両手で幅を示す女兒墨子。その場の女の多くが示し合わせたようにそれを見る。幅は余裕で二〇センチ近くある。

立っているか萎えているかは明言されていないが、どちらにせよそれがかなりの物だということは経験ある女たちには当然理解できる。

目を見合わせ、ちらっと道理夢の握られている部分を見たりする年上の女たち。

「えー？ やだ、立派になっちゃって」

「クラスの男子のと全然違うねって」

幼い従妹が道理夢のモノを見ていても別に何の拒否反応もない親戚たち。

珠美と墨子の母を長女とする爆乳熟女三姉妹は畜産場からそこその距離に並んで家を建てており、それらはつながって行き来できるのだ。姉弟同様に従妹らが一緒に風呂に入ったりしていることは当然のように把握している。特に問題とは思っていなかった。

もちろんそれは女のほうが拒否していないのが大前提で、無理に道理夢が誘うようなことをすれば文句も言われるだろうが。

バイトの女性らが顔を見合わせる。

「へえ」

「顔に似合わず……ねえ」

「いやいや、ああいうブ……パツとしない系はむしろ無駄にデ○チンなもんよ」

——今ブサメンとか言いかけなかったか？ そりゃイケメンとは言えないが、別に不細工でも……ていうか無駄にデ○チンってなんだよ！？ 確かに彼女ができる兆候はゼロだけど……それは女のほうが悪いだけだ。

「あおっ！ ちょ」

握り締められ、つま先立ちになる道理夢。

「ほらほら、考え事してる場合じゃないっしょ？ このまま女になって一緒に働く？ それも面白そうかな」

「ざ、ざけんじゃねえ……誰が女になんかなるか。玉無しなんて最悪……人間じゃねえよそんなの、家畜と同じ……ん」

それはもちろん、男である自分が睾丸を失ったらどう感じるかという個人の感想でしかない。

それはもちろん女たちもわかっている。幼い女兒二人でさえも、別に自分たち女を家畜だといっているわけではないことは。

それはわかっているが、それでもなんとなく癪に障る。

優しく穏やかそうな珠美でさえもそうだった。

——道理夢くんにはそんなつもりはないのはわかってるけど、なんかイラつくわねー、受け取り方によっちゃ、私ら女を家畜並だって言ってるのととれるからね。もちろんそんなつもりはないんだろうけど……でもイラつくのは止められないわ。

「ちょ、みんなどうしたのかな？ あ、珠美姉ちゃん！ こいつなんとかしてよ！」

「ん……なんていうか道理夢くん、今の発言さ……」

パン、と自分の股間を掌で叩く珠美。かなりの勢い。正直、今まで杏に握られて加えられた力を一とすれば、余裕で一〇ぐらい行きそうな勢いだ。

しかしダメージはゼロである。

「大事な物がナイナイの、私たち女全般に……」

「あっ！ 違う違う違う！ そんなことない！」

従姉の言葉に、突然気づく道理夢。

自分の発言が、思わぬ形で受けとられる可能性があることに。

そして「そういうふうに」受け取られたら、この女ばかりで、しかもその女たちが壁の向こうで家畜の睾丸に何か日常的にやっついそうで、そこへの攻撃に躊躇が無さそうな状況では、どういう目に

合う可能性があるか。

自分の最も弱い部分がどういう目にあわされる可能性があるか、考えただけで震える。

必死で言い訳しないではいられない。

「あれはあくまでも男の俺が玉やられたらって話だから！ 元から玉無しのお姉ちゃんたちには関係ないよ！ 確かに女は劣等種族だけど、家畜とまでは思っていない！ だってそんなに役に立たねーし！ コストも高いし！ 人間であるかのように扱わなくちゃならなくて手間もかかるしね！ だからぶっちゃけ家畜以下というか……だから家畜ってことはない……あ、あれ？」

いつの間にか道理夢を取り囲む満面の笑みの女たち。顔は笑っていない。

その中の一人、母親である爆乳熟女がポケットから何か取り出す。

「道理夢、これなーんだ？」

母親。ビン入りの薬を見せる。ナノメカ再生薬。どんな怪我でも一〇秒程度で再生してしまう便利な薬だ。

「け、怪我とか治す薬だろ？」

「そうそう、これさえあれば内臓が破裂しても平気」

「ど、どういう事だつてばよ？」

「だからね、これから道理夢は女性蔑視発言のお仕置に、体の一部分、男の子にしかないところ。この場に二つしかない臓器をゴッシャゴッシャにかわいがられるけど、もしもの時は秒でこれで再生するから全然平気だから、安心してってこと……」

「安心できるかババア！ あ、杏！ さっさと放せ！ 今どういう状況か、玉無しクソマ〇コには分からねえか？ はぐっ！」

ゴリ、と今までの優しい掴み方とは全く違う、潰れてもいいという気迫のこもった握り潰しに目を剥く道理夢。

恋心を抱く年上従兄の悲惨な姿を見ても、実はドSの杏はむしろちょっと興奮する。しつつ、つま先立ちで相手の顔に自分の顔を近づける。

「このカスゴールドが……チン〇ン付いてりゃそんなに偉いの？ 棒がそんなに意味あるの？ それともタマタマ？ 玉がえらいの？」

「付いてることがどんなに不利で弱いか、しっかりたつぷり分かせてあげようね」

「や、やめ……あっ」

背中に柔らかい肉塊が押し付けられるのを感じる。腕の下に手、羽交い絞め。

「はいはい、動かないでね道理夢ちゃん」

「お、伯母さん放して……」

「珠美、取り合えず道理夢ちゃんのお股蹴って。お母さんのお股にも当たるかもしれないけど、女だから大丈夫よ。股間攻撃は男にや必殺、女にやどうってことなし。だから珠美、遠慮なく道理夢ちゃんのキャン玉蹴って」

「はいはい、お姉ちゃんどうぞ」

玉握りの杏が離れる。前に立つ元サッカー少女の珠美。年上従姉の巨乳美人。

「それじゃ、ごめんね道理夢くん。金ちゃん行くから、覚悟して？」

「嫌だ！ 小生、覚悟嫌だ！」

「ぎゃははは！ 何で「小生」なのよ！」

突然飛び出した謎の一人称に爆笑が広がる。テンパってわけがわからないその場で唯一の男の姿も、彼の危機感を体の構造的に理解しえない女たちにはあまり伝わらない。

この世界では体が半分吹っ飛ぶような怪我でも簡単に再生させる技術があるので、睾丸が潰れたらまずいという思いも女たちにはほとんどないのでなおさらだ。治るんだからいいだろう、というのが女たちの多数派意見。というか、口に出す出さないの差はあっても全員一致しているのではないだろうか。

少なくとも、その場では意見の一致をみているようだった。

半円形に道理夢の周りに集まり、その表情とこれから狙われる股間を交互に見る女たち。

母ともう一人のおばが足を押さえ、開かせるのも忘れない。爆乳熟女三姉妹、手慣れた物だった。これは子供のころからやってるな、と思わせる手並み。クラスの女兒を率いて、生意気な男子を金的処刑拘束する女兒三姉妹の姿が一瞬道理夢の脳裏に浮かんだ。

が、もちろんそんな妄想は一瞬で吹き飛ぶ、それどころではない。

「うわ、ちょ……放せばバア！」

「はい、タマタマへのお仕置きの理由がさらに増えましたー」

「ひ、ひいいい！　なんで玉……玉ばかり……」

「そりゃ男の子の一番の急所だからでしょ？」

「そうそう、男の急所はお股のボール。女はみんな知らない顔して、実は全員知ってるのよー」

「やめ……理須夢……」

「お兄ちゃん私ね、お姉ちゃん欲しかったんだ！」

「ひ、ひっ」

「そうなんだ理須夢ちゃん。それじゃ私、頑張っちゃおうかな？」

「頑張れ頑張れお姉ちゃん！　潰れろ潰れろ金の玉！」

手を叩く杏。自分のほうが年上だから多少守ってやらなければというような配慮がいる立場でもないし、年下過ぎもしない、ちょうど容赦なくグイグイ行ける立ち位置である。

彼女の金責め煽りに他の女たちも合わせて手を叩きだす。

「潰れろ潰れろ金の玉！」

「今日から君は女の子！」

「大事なモノとさようなら！」

「両玉潰れて女の子！」

「うわああ！　お、お姉ちゃん、冗談だよな？　ほんとに蹴ったりしないよね？」

「あは、もちろんよ。そんなひどいこと……ほいっと！」

「あぐっ！」

珠美は足の甲で親戚の股間を的確に蹴ることもできたが、あえて深く踏み込んで爪先を母親の尻の向こうに突き出し、二人の股間を脛で蹴る形にする。

「きゃっ」

「あがっ！」

「うふふ」

足を下す。

「お姉ちゃんどうだった？」

「そうね。前の方に何か柔らかい物が出っ張ってたんで、ぐによっと押し潰して、あとは平らで柔らかい感じが二つでね……」

「いやーん、股間が痛いわ」

仁王立ちの珠美の母有矢（あや）。追撃が来たところでそれがどうしたといわんばかりに堂々と立ちながら、片手で軽く股間を撫でる。

その前で、羽交い絞めを解かれて崩れ落ち、股間を押さえてまるまる道理夢。

片や仁王立ち、片や痛みで倒れてまるまる。

「あらまあ」

「股間の強度における、男女格差がわかりやすい形で現れたわねえ」

百万年生きて、一度も金的を食らわないでいいという特権を持った者たちがニヤニヤしながら特権のない者を見下ろす。

「はぐううう」

丸まってうめく道理夢。

激痛。手の中、探す、睾丸。二個ある。涙が出るほど嬉しい。治るといわれても、潰れていいなどというのは女の発想。男は絶対にそれを受け入れられない。両手で肉袋を覆う。追撃は絶対に許せない。あつてはならない。足で挟み、手で覆って、絶対に守らねばならない。

有矢はそれを見下ろし、眉をしかめて娘の方を向く。

「珠美一、ちょっと強く蹴り過ぎじゃない？ これじゃ楽しめない……じゃなくて、その……ほら、道理夢ちゃんかわいそうじゃない？」

「えー、お母さんだって笑ってんじゃん。眉しかめて見せて、目は笑ってじゃんーん。所詮金的他人勢だもんねお母さんは！」

「あんたも同じでしょーが！ あんたも私も、金的無効勢！」

「あはは！ この場の全員……道理夢くん以外無効だもんね。それに、蹴りってこのぐらいだよ？」

「あっ」

パン、と勢いよく足の甲で母の股間を蹴り上げる珠美。何の躊躇もない。これが仕事の都合で都会で暮らす父に同じことをするのなら、かなりの理由がないと遠慮するだろう。しかし母親相手なら珠美は理由があれば特に躊躇わない。

なぜなら、母は自分同様そこへの攻撃など屁でもないのだから。

その母が叫ぶ。

「いたっ！ ちょ、おおおお、もう……痛いじゃないの」

「ごめんごめん。でも、二人への脛蹴りが一なら、今の足の甲による蹴りは五ぐらいだよ。別にまるで本気でもないんだけど……道理夢くん、まだダメ？ お母さんは五倍蹴りでも平気だよ？ 痛くもなんともないよ？」

「ちょ、平気じゃないよ、痛いつての。股間は別に頑丈なところじゃないんだから。ま、男の子の股間と比べちゃうから「やべ、女の股間って無敵かも」って思っちゃうけどさ」

腰に手をやり、やはり仁王立ちの珠美母。その下で丸まってうめく道理夢。

二人を見比べ、ニヤニヤする女たち。

「あらあら」

「さっきからほんと、凄い股間格差ねえ。格差は広がる一方で、全然縮まる様子がないわ」

「弱点付いてるとたいへーん」

「うふふ、こういうのを見ると、付いてなくてよかったって心から思えるわ」

「工作中ずっとそれは……」

「ダメダメ」

「おととと」

「それじゃ、そろそろ行きましょうか」

バイトというかパート的な女性たちに声をかける珠美の母。現場の責任者である。

仕事帰りに、あまり足を止めるわけにもいかないという配慮。

これが親戚だけであるなら、もう少しお楽しみだったかもしれない。

だが、三姉妹の長女としてこの畜産業の責任者なのだから金責め大好きドS女子としての欲望のままに振舞うわけにもいかない。

門の少し横に駐車場があり、何台か車がとまっている。

「それじゃ、道理夢くんタマタマお大事にね？」

「大事なところだからねー」

「心配しちゃうよ」

内心は「私ら付いてないからわからんわー、なんかあったらナノ薬で再生すりゃいいっしょ？」でしかないが、口先だけはそれらしいことをいっていくパートの大人女子たち。

上司や同僚である道理夢の親族の女たちにも挨拶してから、それに乗って帰っていく。

「くむううう」

今だ、転がる道理夢。

顔の近くにしゃがむ杏。

「あははは、道理夢、まだそんなに痛いのか？」

「い、痛すぎる……」

「きゃははは！　　というか、タマタマが弱すぎるんじゃないか？　二つでもこれじゃ何個もあつたら……ま、いいか。元気になったら歩いてきなよ」

立ち上がる。

家は近いので、みな運動がてら歩いていた。車で来ているなら乗せて運んでくれたらろうが、担いでまで行くという話にはならない。非力な女性たちなのだ。道理夢ももう十七歳であり、この場の誰一人力ではかなわないどころか、上位三人と押し合っても道理夢が勝つだろう。

その辺、男と女の力の差がわかっているからこそ、それを一方的にひっくり返す「金的」を愛するのがドS女子たちである。

力で勝てただろう何年前より、今のほうが道理夢への金的は楽しめる口には出さずとも母たち三姉妹は強く感じていた。通である。

ともかく、親族たちも次々に帰路につく。

「それじゃ、先に帰るからねお兄ちゃん」

「理須夢、もうお姉ちゃんかもね」

「ぎゃははは！　墨子ひどーい！」

「いやいや、あんたが望んでた話じゃん！」

一〇歳女兒が笑い転げながら走っていく。

「道理夢ちゃん、珠美がほんとごめんねー？　でもまあ、ちょっと悪いこと言ったからある程度は仕方ないよね？　それじゃ、お大事にね……玉！」

道理夢より明らかに股間に強い衝撃を受けた珠美の母も平気で歩いていく。

母親が息子の顔を覗き込む。ゆさ、とビーチボール二つのような爆乳が重力で変形するが息子としては全然うれしくもなんともない、どうでもいい肉の塊である。

「道理夢、ほんとにしんどかったら言うのよ」

「ん、あ……」

——いやいやババア、今の俺「本当にしんどく」なさそうなのか？

息子が姪にやられた場所が急所ということはわかり過ぎるほどわかっている母親。

だが、潰れていないのも様子でわかるからには、まあ放っておいて大丈夫だろう程度の判断しかなかった。所詮ついていない側の人間。

「タマタマ痛い？ 道理夢くんごめんね？ すっごーく手加減したんだけど……本当だよ？ 私が本気出したら、タマタマ二個ともぶちゅっ！ だからね。サッカーで鍛えて、仕事でタマタマの強度はしっかり把握……いや、まあそれはいいとして。それじゃ、お疲れね」

下手人も気軽なものだ、「お疲れ」と相手に痛みなどないかのようなことをいって去っていく。

順番に話しているようだが、ほぼ同時に女たちは言いたいことをいって家に向かって歩き出しているのだ。

本当に、大して心配しているものなどいない。

潰れていないのはわかっているし——実際に見ずに、反応でそれがわかる女ばかりというのはある種恐怖である——別に意識がないわけでもない。それどころか、無理をすれば動けるぐらいのダメージなものわかっていた。

それなら、女の身では大して心配する気にならないのかもしれない。金的を食らった理由が女性蔑視発言だったということもあるだろう。

残ったのは、股間を押さえて丸くなった道理夢一人。

「ぐむううう、ちょ、マジ？ キ○タマ蹴って、放置？ そりゃ、あのままキ○タマお仕置きが始まるよりやましだけど……ふざけやがって、やっぱり玉があるモノの苦しみは、玉があるモノにしか分からない。同じ種族でもだめだ。むしろ、違う種族でも男同士のほうが……」

何とか体を起こして、股間を押さえつつ胡坐を組む。まだ眩暈と吐き気で立てない。いや、無理をすれば立てるが、無理してまで立ちたくない。

痛みに耐えて座る。

ふと、壁の方を見る。

——あの中にも、俺同様、あの女どもに玉をやられてる男がいるのか？ あの玉無しどもには一生わからないこの苦痛が、理解できる連中が……

見る。

と、光。

壁の中から一筋の光が抜けてきて、スッと顔に当たる気がした。

「え？ なんだ？」

目を瞑る。瞑っても、強い光でないのに抜ける。が、すぐにそれも消えた。

「……何だったんだ？」

首をひねる。

ともかく、しばらくして帰る。

家では、先ほどの金無し集団が待っている。

祖母は引退し、祖父とともに都会暮らし。

都会といっても三〇分も離れていないが。

父や叔父たちは製品を輸送加工販売する会社を街で経営している。

道理夢も大人になればそちらに回るわけだ。畜産そのものは女たちの仕事。

道理夢が暮らす三世帯住宅は——母たち三姉妹それぞれの家である——それぞれの家が三角形の頂点に立っており、通路でつながり、真ん中に共有スペースがある。

共有スペースも家同然なので四世帯住宅にしてもいい。

モジュール化された家は家族の増減に合わせて簡単に組み替えできる便利なものだ。

ともかく、その真ん中の共有の建物に入る。

玄関近くを珠美が通りかかり、微笑みかける。

「お帰り道理夢くん、さっきはごめんね？ タマタマ痛かったでしょ？」

「まだ痛いよ珠美お姉ちゃん」

「きゃははは！ もう！ 大げさ！」

笑って肩を叩いてくる。冗談と思っているようだ。ブルンと揺れるサッカーボール二個に目を取られつつ、頬を引きつらせる。

——まったく、冗談じゃねえ。マジでまだ痛いんだよ。

食事の後、風呂に入る。

共有スペースにある広い風呂。髪を洗っていると脱衣場にドタバタと走り込む音。

ガラリと開けて入ってくるのは女兒二人。まったくいらない胸、胸より出ている腹、無毛でむっちりした肉の割れ目が目を奪う。

座っているので、ちょうど視線がその当りになる。

兄の視線に気づき、ニンマリする理須夢。

「あは！ そこには何もないよ？ お兄ちゃんと違ってね！」

「道理夢お兄ちゃん、今日も弱点ブラブラですかー？」

駆け寄り、風呂椅子を引っ張ってきて左右に密着して座る女兒二人。

「ちょ、お前ら……はうっ！」

足を閉じるが、股間を守り切ることはできない。小さな手が滑り込み、ギュム、と肉玉を握る。

「きゃはは！ お兄ちゃんのタマタマやっぱり鶏の卵みたい！」

「ちゃんと付いてる？」

「付いてるよー、ざんねーん！ 今日からお姉ちゃんかもと期待してたのに！」

「事故に見せかけて握り潰しちゃえ！ 私も引っこ抜くから！ あは、ぶっとくて手が回らないよー」

「あーいいっすねー。それじゃ……ちょっと手を滑らせちゃおうか！」



「あ、ちょ、ちょ」

墨子が一物を掴み、引っ張る。元から二〇センチ近いので、引っ張られると三〇近くにまで達する。

「あおおおお、ちょ」

「食らえ必殺金潰し！」

「ふごおおお！」

「きゃははは！ 対男用の必殺技に道理夢お兄ちゃんなすすべ無し！」

頭を洗い、手がふさがっている状態で女兒たちの突然の連続攻撃に身動き取れない道理夢。

潰れたら終わり、というならいくら女兒相手でも多少は荒っぽく突き放せもする。しかし簡単に治るというのなら、一七歳で体はもう大人、下半身は大人以上の道理夢に、一〇歳の妹と従妹を手荒に突き飛ばすなどとても出来なかった。

その優しさをはっきり理解しているからこそその女兒二人の密着急所攻撃である。すべすべ全裸女兒が左右から密着し、男の急所を攻撃してくる異常な状態。異常だが、道理夢にとっては昨日も同じことをやられている日常だった。

手荒なことをしてこない優しい兄・年上従兄に女兒二人も本気で攻撃したりはしない。それは道理夢にも伝わっている。だからこそ怒れない。そして肝心なことは、子供でしかも女の子の「手加減」は十分男性器にはダメージを入れてくれるという事だ。

「ちょ、ちょ……俺の負け……負けだから勘弁して……特に玉は……」

「えー？ もう負け？ 仕方ないなあお兄ちゃんは」

「キ○タマは弱いんだよ、仕方ないって」

「あはは、もう……」

肩をすくめて、玉を離して立ち上がる理須夢。従妹の墨子も満面の笑みで立つ。

そして、股間を押さえてグネグネと腰をひねる道理夢の前でぐいと自分たちの幼い女の部分を突き出し、指でクニッと開く。

「やっぱりお股はこうでなくっちゃね」

「変な弱点ブラブラしてない、強い股間をよく見てよ」

「く、くううう」

「強いのはこっち。弱いのはそっち。わかる？」

「なんだよ……」

——生まれつきの体の構造の違いなんだから仕方ない。それをこんなチビガキに誇示され、見下されて……でも確かに、俺のここは、こいつらの子のロリマ○コより数段弱い……この差は不公平すぎる、なんか悔しい……

泡を流し、湯船に入る。湯船も広い。高性能の太陽光パネルで発電したタダ同然の電気があるので毎日たっぷり湯を使っても何の問題もない。

並んで三人。

当然挟まれる道理夢。左右から伸びる手。当然のように股間にのび、湯の中で緩んだ肉袋の中身を一人一個ずつ握り、優しく揉む。

揉みつつ、歌いだす妹。

「キ○タマ潰し、キ○タマ潰しー」

墨子は体をさらに密着させ、上目遣いでおねだり。

「ねえ、片金ぐらいなくていいよね？ ね？ 潰させてくれない？ ねえねえ」

「そういう話しながら揉むのはやめてくれっ」

「きゃはは！」

「お兄ちゃんも反撃していいよ、ほらほら」

手を引っ張る。

「あ、おいやめ……はうっ」

「大人しくしろー、キ○タマ握られて女の子に逆らえると思ってんの？」

「わ、わかったから……」

手を引っ張られ、左右の幼い割れ目を掌で覆う形になる。

——杏といいこいつらといい……「股間に手をやりあうけど、自分は女だから握られない」って優位を感じられるシチュ好きすぎんだらうちの女どもは……

「えへへ、お兄ちゃん握ってきていいよ？」

「まあ、握るもんないんすけどね、私たち女の子様には」

「格差実感の構え」

「く……この……」

女兒二人を侍らせ、睾丸を握らせ、自分も股間に手をやっている状態。

——これは俺が追い込まれてると知らず、ここだけ見た奴がいたら俺が犯罪者扱いなのか？ そんな……急所握られ、格差をしっかりと実感させられた上に俺がパクられるなんて……

震えつつ、すべすべの太もの間で、女兒の股間に触れているしかない道理夢。

夜も、共有の建物にいくつかある寝室で寝る。当然のように左右に女兒二人。パンツにシャツである。

朝は早く起きねばならない。女兒二人が先に目を覚ますと、朝立ちした一物に気づき、玉責めで遊ぶ流れになる。金的で起こされる悲劇を避けるには先に起きるしかない。

寝る前には杏も加わってしばらく四人で遊ぶことになる。油断ならない。油断すれば女三人結託して急所攻撃遊びをやり始めるのだ。昔はさらに珠美も加わっていたが、今は母たちと仕事の話もあり、そうそう毎日遊んでもいられない。

寝るときはさすがに杏は自分の部屋に戻るが、たまには戻らずに一緒に寝ることもある。

今日は三人だ。

そろそろ寝るように言わないと遊び続ける二人の女兒を寝かしつけ、道理夢も布団に入る。

しばらくして、驚く。

コンクリートの部屋に閉じ込められている自分に気づいた。

「なんだここは!？」

思わず叫ぶ。

と、横から声。

「うるさいね……物心ついたときから、あんたはここにいただろ？」

五人の女。皆年上で多少太り気味だが、驚くほど巨乳。そしてもっと驚くべきことに全員全裸だ。

「な」

驚き、後ずさる道理夢。

足。普段一族の女たちに責められ続けている股間を、女に驚かされた時は反射的に守るようにしている道理夢。

だが、足が閉じない。

大きすぎる。

睾丸があまりにも大きすぎて、閉じられなかった。

「う、なんだこれ……」

女たち同様に全裸の道理夢。その股間にぶら下がる睾丸は一つがずっしりと彼の頭と変わらないサイズだった。

そして、一物もメートルに達するほどの超巨大サイズ……だが、そちらには意識がいかなかった。

それよりも、袋だ。

胸のあたりから、胴体の間まで、いくつもの肉袋が垂れ下がっていた。

陰囊。

陰囊がついている。一つではない。

腰と胴体の継ぎ目、へその下、鳩尾、胸の間辺りに、それぞれ本来の道理夢の陰囊サイズの大袋が四つ垂れ下がっている。股の間の頭二つの巨玉を入れて、陰囊は計五つ。

「うわあああ！　なんでこんな……」

陰囊が巨大化し、新たに四つもついている。コンクリートの部屋で、太った大人の女たちと一緒に入れられている。

しかも、その女たちは全裸だ。

無茶苦茶な状況に頭がぐらぐらしていた。

一物がメートル級のサイズになっていることは、別にショックではなかった——いや、理性では大きすぎるだろうとわかるが、それでもどこか心の底で自らの一物が恐ろしく強大になったことに嬉しさも感じる。

とはいえ、とても喜んでいられる状態でもないが。

この後、豚の体に精神だけ入った道理夢が親族の女たちに複数の陰囊を潰されまくり。

人間に見える雌豚たちにむりやり交尾させられ、絶頂で飛び跳ねる雌豚たちに腹部の陰囊を押し潰される金責め雌豚ックスを強要されます。

続きは製品版でぜひお楽しみください。